

黒い力と白い願い(Ⅲ)

—W・スタイロンの「ナット・
ターナーの告白」—

安部大成

VIII

前回は I Judgement Day と IV It Is gone にW・スタイロンによるナット・ターナーの変革の宗教理念と反乱動機の解体処理作業をみた。そして、この作業が必要であるのは、アメリカ社会に反体制派として力を結集し始めたブラック・パワーをスローガンとする黒人解放運動と、その影響をうけ始めた黒人一般の、黒人意識の高揚に対する社会的恐怖が存在するためだ、と述べた。この恐怖が、黒人解放運動の歴史に、不動の地位を占め、黒人の解放精神の背骨の一部をなしている、奴隷反乱の指導者、ナット・ターナーの戦斗的、非妥協的解放精神とその人格、つまりそのイメージの倒壊を必要とさせた。

ところが、この社会的恐怖より生じたナット・ターナーの解体処理は、それがもともと人種主義に由来する恐怖であるため、その解体処理過程で、この人種主義の心理的側面が露呈されている。ここでW・スタイロンの作品に現われる黒人に対する白人の心理的恐怖を検討したい。

W・スタイロンは II Old Time Past と III Study War でナット・ターナーの精神感情を再構成し、彼を白人女性の精神的、肉体的魅力の虜にし、黒人と黒人である自己を嫌悪する、生ける自己矛盾者に仕立てる。そして、ターナーの反乱をこの自己矛盾の精神的破綻による「白人大殺害事件」と

し、さらに事件後に、白人女性への宗教的肉体的憧憬を通じて白い神の救済にあづからせる。

このターナーの解体、再構成、救済の過程でW・スタイロンは白人社会に流布し、深くその社会意識に巣っている、白人女性と黒人男性との性関係にまつわる人種主義的感情とドグマに依拠する。人種主義に由来する黒人恐怖感が露呈されるのは、この人種主義的感情とドグマに依拠する仕方においてである。

W・スタイロンの小説「ナット・ターナーの告白」Part II, Old Time Past に再構成された、ナット・ターナーの幼少期とナット・ターナーの「自供書」のそれとを比較してみると次のようになる。

ナット・ターナーの「自供書」

① 宗教心の極めてあつい祖母に愛着し、その感化を強くうけながら、黒人奴隷達の間にあった父母のもとで育った。3、4才の頃、自分が口にしたことを母が耳にして、それは自分の生前の出来であるのに驚いた。そこで、父母は自分は特異な能力を持ち、何か偉大な目的を達成するために、この世に生れて来たのではあるまいかと真剣に語り合っていたことが印象に残っている。

また幼少の頃、泣いている自分をなだめようと一冊の書物が投げ与え

W・スタイロンの「告白」

① 祖母は13才でヨークタウンに陸揚げされたとき、奴隷船で他の奴隷と性交していて、妊娠した姿でセリ台に立った。生み落した子供が自分の母で、祖母はその時発狂していて自分の子供を殺さんとしたと伝えられる。従って自分は祖母を知らず、また父も自分が生れた時には逃亡して会ったこともなく、母に自分の父のことを尋ねると叱られさえた。母は奴隷主、サミュエル・ターナ家の住み込みの家事手伝い人で、自分はターナ家のネル夫人とその二

られたことがある。自分はいつ頃、アルファベットをならったのか記憶にないが、この時泣くのを止めて、色々なものの名を綴ってみせて、家族（祖母、父、母）の者達を驚かせたことがある。

② 少年時代には、奴隷の間で自分は秀れた判断力のある、予見の利く特異な素質を持った人間であると他の者達とは区別されていたし、これは白人の間でも評判であった。自分も特異な素質を自覚し、人との交わりをさけて主人の仕事を終えた余暇は、祈りと断食で時をすごし、また各種の実験を試みたりしていた。父は自分の少年時代に奴隷農場より逃亡することに成功していた。自分もそれにならって逃亡したことがあるが、聖霊が現われて、元の仲間のところもどり、主人につかえよと命じたのでそうした。

人の娘、ルイザ嬢とエンメリン嬢に黒い坊やとして、ペットのように可愛がられて育ち、特に宗教心のあついネル夫人の感化をうけた。

② 父を知らぬ自分であったが、60名の奴隷を所有する農園主、サミュエル・ターナーの情け深い人格に敬服していた。彼は奴隷に教育を授けることによって黒人の心身を改良し得ると信じていた人で、自分に職業教育をほどこし、将来は自由黒人の身になり得るよう、心を配ってくれた人でもあり、自分には彼はモーゼや予言者エリヤの風格をそなえた人に思われた。幸運に恵まれた自分には、他の奴隷の愚劣な存在の仕方とその宿命が耐え難く不快に感じられてならなかった。

この幼少期から少年期までの人間形成の対照的な基本的段階をみれば、W・スタイロンの作製したナット・ターナーの末路はある程度予想され得よう。

小説に現われる主要人物は、他の様々な人物との相互関係、行為を通し

て、その感情、思想、行動が規定される。

Ⅱ Old Time Past, Ⅲ Study War に現われるナット・ターナーの精神内容を規定する人物関係を検討すれば、彼が生きたまま自己矛盾の地獄に落ち憤怒と逆上の精神的錯乱の裡に、この地獄を脱せんと試みた、大量殺人事件への破滅の道筋が明らかになる。

こゝに幼少期より青春期までのナット・ターナーに深い影響を及ぼした人物をまず Ⅱ Old Time Past から取り上げてみよう。

白人男性

サミュエル・ターナー

ナット・ターナーが18才の頃まで、その元で働いたターナー農場の主人。

制度内での個人的博愛主義者で、奴隷制を悪とみなしながらも、無教育な黒人を偏見の侵透している白人社会に解き放つのはさらに黒人を不幸にすると考えている。

そこで彼は善意のある奴隷主として、ナット個人に、初等教育、宗教教育、職業教育を与えて、将来は自由黒人の身分を買いもどさせる計画を持つ。

ベンジャミン・ターナー

サミュエルの兄。ターナー家を訪れて来る二人のエピスコopal派の僧、学者と同じく、黒人は本性から劣等人種であり、神に呪われて永遠に白人の下僕として働く運命にある、従って奴隷制度下に生存する黒人はその本性と宿命にふさわしい生存の仕方をしていてと考えている。

ウィロービー

ベンジャミンの長男。奴隷居住地にいる若い黒人女を意のままにとらえて性欲を満たす。

彼はナットの同一民族、同一階級の女性を奴隷所有者側の力を発揮して奪い取るによりナットを民族的、階級的に屈服させ不能な存在にさせる。

ルイス

ウィロービーの弟。

彼はナットが少年期に憧憬の念をいだき、青春期に至って、ますますその念を深めていったサミュエル・ターナーの娘、美しいエンメリンと、ナットが立ちすくんでいる近くの草村で性交する。

ルイスがエンメリンと強引な肉体関係を持つことが可能なのは、両者の民族的人種的同一性、身分的階級的同一性にあり、これから完く排除されているナットは、ルイスとエンメリンの性交を目撃することによって、白人世界の存在、つまり彼には社会化された民族的人種の差異と身分的階級的障壁によって、決して入り込むことの出来ぬ世界が身近に存在していることを、はっきりと思知らされる。彼はこゝに黒い世界から脱し得ない絶望と共に黒人であることの無力感を持つことになっている。

アレキザンダー・エッピス

サミュエルが後ほど経済不況によって、奴隷を手離すことになった時、20才になったナットを買いうけた男。60才、同性愛の性癖のある説教師である。

まずヒッピスが60才ばかりの老醜のひどい男である点に注目しよう。ナットは20才になった若々しい青年であり、その青年が老化した醜い身体の持主に支配される。これが可能なのは黒人奴隷制度の存在とエッピスが「優越人種」白人であるためである。

次にこの新しい奴隷主が同性愛の性癖をもった変質者である点である。20才の黒人奴隷青年に60才の白人奴隷主が変質行為を排む。ナットはただ恐れ、尻ごみするだけである。これには白人男が黒人男を弱性化させて服従させ、黒人の男らしさ、つまり力の源泉を奪わんとする意図が含まれている。

白色人種の老醜が黒色人種の若美を支配し得るという加虐的グロテスクさは白色人種優越黒色人種劣等主義、つまり人種主義の醜悪さ自体をあからさ

まにみせている。

さらに、エッピスが説教師であるのは、W・スタイロンの作品からすればネル夫人の宗教感化によって、説教師になろうと思立ったナットの心を察して、サミュエルがわざわざ彼を説教師に買却した。これがこともあろうに変質者であった、という悪質な皮肉を設置したものであるが、意図されているのはナット・ターナーが説教師であったという歴史的事実を同職業者をひわい化することによって汚さんとするものである。

白人女性

ネル

サミュエル・ターナーの妻。12、3才頃のナットを大変可愛がり、読み書き、算数を教え、聖書を読み聞かせて彼の才能と情緒と宗教的素養の基盤を築いた女性。

ナットは彼女のやさしさと思いやりに母性愛に近いものを感じ、彼女の美しさに白人女性の美をみ、心から愛着し、魅了された。これは黒人少年の白人女主人に対するプラトニックな愛であった。だが、この支配者にして異人種である女性への心の傾倒は被支配者にして同人種である仲間を軽蔑する気持を子供心に育てていった。

13才頃のことである。高熱に襲われ、母の薄ぎたない部屋の、汚れた穀物袋の寝床で苦しんでいた時、ネル夫人は彼を自分の邸宅に移し、真白いシーツの張られた、柔らかく清潔なベッドに寝かせて看病してくれた。その時、彼を取り囲んでいた白人女性達の軽い足どり、彼の頭に触れる柔らかい手、口に水さしを挿入してくれる白い指、ナットの回復を願うネル夫人の涙ながらの甘美な声などが、彼をすっかり白人世界に包み込んで、この世とも思えぬ幸福感に酔わせた。彼は主人の邸宅の窓から見える黒人達の世界を嫌った。苦役、怠慢、無知、不潔、愚行、醜悪の世界がそこにあった。

また16才になった頃、彼はネル夫人の感化によって将來說教師になること

を夢みた。だから、敬愛する彼女の柔らかい白い手で、クリスマスの贈物、聖書が彼の胸元に暖かく押し与えられた時、彼は幸福感と興奮の激しさで目まいを感じるほどであった。

自室の窓の外には贈物をうけとるべく黒人達が列をなして主人宅へ来ていた。これを見ると吐きけをもよおすほどの嫌悪感に襲われ、彼は目をそむけ思わず聖書を開く。そこにはホセアの愚昧なる罪びとに対する叱責の言葉が読まれ、黒人達の存在に暗い気持になった。

エンメリン

サミュエル・ターナーの次女。

ネルが少年期のナットの精神形成の面で強い影響を及ぼしたに対して、エンメリンは性衝動の面で決定的な影響を与えた。

ネルとナットの間には白人女主人と黒人少年召使いという、使用人と被使用人の関係を通してではあったが、相互に人間関係が成立していた。

W・スタイロンが美しい白人中年女性と黒人少年の間に相互的人間関係を成立させているのは、まさに一方が中年であり、他方が少年であるという年齢的へだたりがあるためである。ナットは少年期にあって未だ性的衝動と異性意識を十分に自覚して居らず、ネルは年輩者として、世代の距離と使用者の距離を保ちつつ、強い保護者意識で、子供であるナットにかまわっている。

人種主義感情、意識、ドグマに逆行する白人女性と黒人男性間の性関係の成立を予想させる相互的人間関係は完くない。だから、ネルとナットは親しい関係に置かれているのである。

ところで、エンメリンとナットの関係は如何にあるべきか。一方は20代中頃にある若くて美しく、魅力ある肉体をした奴隷所有階級の白人女性であり、他方は10代の終りに達した、若々しい生命力のみなざる、肉体の持主、黒人奴隷青年である。この若い二人の間の関係に手ぬかりがなくてはならな

い。

W・スタイロンは人種主義の強い願いに応じて、二人の間をまず用心深く白人女の側から離反させる。白人女性エンメリンは黒人青年ナットの存在を全く意識しない。彼女にとってナットは一個人としては愚か人間としてさえ存在していない。それは自然界に属する木や草やたぬきと同じ次元にある。

ところがナットにとってエンメリンは心から敬愛してやまぬ女性なのだ。つまり、白人女性は黒人男性に興味を示さないが黒人の方は非常に関心があるのだ。敬愛するだけではなく、彼はエンメリンが最高に美しい女性であると感じる。この奴隷所有階級の女性美に心を奪われるのは彼が奴隷階級の黒人女性を醜いものと感じるような白人の美意識、美的享受、美的評価を有するためであって、それは彼がこの階級の家庭で白人女主人達に教育され、黒人であり、奴隷でありながら自からこれを嫌悪する、意識の白人化した黒人に育ったためである。

W・スタイロンがこゝに意図しているのは黒人としての美意識、美的享受、美的評価が欠如し、自らの民族を醜く感ずる男に、黒人解放精神なぞ生れ得る筈がない、というナット・ターナーにおける黒人意識不在の設定である。W・スタイロンの作品にたゞ一回、黒人女性が美しいとナットが回想するところがある。この女性はナットの母であって、この背が高く美しい黒人女性は奴隷監督人マックブライドに犯される。これを不本意にも目撃したナットは、早くも少年期に白人男性の力に畏怖し、自己の無力性、卑少性を体得する。W・スタイロンはこの事件の設定によって、ナットの母に対するイメージを倒壊するのみでなく、黒人男性の力をも奪う。黒人の女性美は白人には好色性以外の何物でもない。好色感を持った白人は支配者として持つさまざまな力でこの願望を満足させ得る。被支配者である黒人男性は無力であり、劣っている故にこれに甘んじ、黒人女性はその美しさを好色性に歪曲され、白人男性の欲望の対象とされることに甘んじなければならない。これがこの世の定めであると彼は人種主義の論理を展開してみせる。

この人種主義の論理は両刃の剣である。だから、それは人種主義者スタイロンをも、人種主義的白人読者をも切る恐れがある。人種主義社会の心理的(個人的)恐怖はこゝに生ずる。

黒人の女性美を白人男性が好色性の領域で把握するなら、白人の女性美はまた黒人男性によって好色性の領域で把握されはしないか。当然そうされることがあろう。そればかりではない。黒人の女性美を白人男性が好色性の領域で把握するなら、黒人の男性美は白人女性によって好色性の領域で把握されはしないか。当然そうされることがあろう。

これは人種主義意識を持つ者達には決してあってはならぬ事であり耐えることの出来ぬ恐ろしい推測である。

この恐怖を生む妄想から脱するには道は一つしかあるまい。人種主義から自らを解き放つ道を歩むか、或は新しい欺瞞の技功を使って、真実に当面するのをさげ人種主義感情を満足させるか、である。勿論W・スタイロンは後者を選んだ。

彼はエンメリンとナットの間に次のような関係を設定する。

- ① エンメリンの意識にナットは人間、または個人としては存在しない。だから異性意識は全く存在する余地がない。
- ② ナットは奴隷制度の身分制を内在化しているので彼女との社会的距離を保ち、エンメリンと相互補完の人間関係を期待しない。
- ③ 彼女に対する崇拜心はエンメリンを現実から遊離させて理想化するので、彼には無限に遠い心理的距離が生じている。だから、彼女を間違っても犯す気持にはならない。

この三つの安全装置を設置しておいて、W・スタイロンはナットをしてこの白人女性の精神と肉体に心底まで魅了させる。

ナットが青春期に達した頃、主人サミュエルは彼に職業教育を授けるべく邸宅の召使いの仕事を解いて、白人監督のもとに大工仕事に従事させる。

彼と同年輩頃の黒人達は奴隷農場の片隅で自由奔放に性の快楽にふけて

いたが、ネル夫人の宗教感化をうけた彼はこの種の行為は神の聖なる影響にあづかる上で大きな妨げになると考えさせていた。その上、彼には黒人異性に関心はなかった。彼はエンメリンの持つ白人の女性美に魅了され切っていたからである。

花園にとりまかれた建築美を誇る邸宅に、華麗な衣服を身体にまとい、ぜいたくな食事をし、読書や音楽にひたり、崇高なもの思いにふける生活から生じたこの階級の女性の精神美に彼は魅かれていた。だが、健康な身体が自然に呼び起す性の衝動に抗し難く、この欲求にさからって心を痛めつけるよりもよからうと毎週一度、日を決めて、彼はこれを処理していた。

この処理の最中、想像の中で欲望の対象となるのは、決して、黒人の少女でなく、名も知らぬ白人の少女の肉体であった。

仕事場に住居を移したナットはエンメリンの姿をみかける機会が失われて切なく孤独であったので、せめて一日に一、二度彼女の姿を見撃させてくれと祈りを捧げるほどであった。

エンメリンは時々二人の黒人少女をつれて邸宅の丘の畑で暇つぶしの仕事をすることがあった。空を仰ぐ顔の美しさや日の光をあびた髪輝きは広々とした空の青さと彼女の肌の白さと共にそれはすばらしいものであった。この貴高い美しさに魅了されながら、ナットは別の美しさにも魅了された。それは彼女の汗ばんだ肌や、華麗な衣服におもわれた腰や胸の動き、白い柔らかい肉体を支える背骨のたわみなどであった。エンメリンのこの肉体の動きに彼は異常に執着するようになった。彼は労働から解放された、胴のくびれた柔らかい肢体をもつ上流階級の女性の肉体にも魅了され始めたのであった。

エンメリンはナットが生きて呼吸していることすら殆んど意識していなかった。だが、彼は召使いの少年であった頃、一度、彼女の白い手で腕に触れられたことを、よく記憶していた。それは彼女に命ぜられて植木鉢を持った際、これをこわして叱られ、腕をつかまれた時であった。彼女の白い指が触

れたナットの黒い腕のその箇所は焼けつくように感じられた。彼はこの少年の頃の出来事が忘れられないでいた。それほど彼女の魅力ある肉体に敏感になった。

或る夏の夜、彼が年頃になっていた頃、ターナー家でパーティが催され、彼は接待係をして多忙であった。この日、彼には予想もつかなかった出来事にぶつかった。

月のない、熱気をはらむ夜、外に出て行って、草かげにエンメリンが圧倒されたような、熱っぽい興奮の声をもらしているのに気づいて立どまった。彼女は時折、低く圧した声で神の名を呼んだりしていた。この異様な雰囲気じつと聞き耳を立てて立たづんでいた彼はもう一人誰れかがいるのに気づいて仰天した。荒い、興奮した、激しい男の息づかいが聞え、エンメリンがこれに感応している。彼女はいとこのルイスと性交中なのであった。その性の歓喜に、こともあろうに彼女は神の名を口走っているのであった。

これはナットを混乱させ逆上させ、「絶望的な、際限のない挫折感」を彼に与えたとW・スタイロンは述べているが、その挫折感の内容は述べてない。作品の展開過程でそれははっきりしているからだ。これはナットが黒人であって白人でないという人種的差異に対する挫折感である。白色人種が黒色人種を奴隷化し、人種主義が制度化している世界ではエンメリンに象徴される美しい白人女性との人間関係を自然に成立させ、機会が到来すれば、相互補完的身体関係を成立させ得るのは同一人種に属する白人の男だけであって決して黒人の男ではない。ナットにはこの世界は閉されている。白人の男は美しい黒人女性を奪い取るのみか、ナットが心身ともに敬愛し憧憬する白人女性をも占有し得る。ナットは黒色人種である故に絶望する外ない。或は美しい白人女性と関係するにはその肉体を力づくで奪う以外にあるまい。だが、こゝには相互補完的な関係は成り立つまい。(この点をW・スタイロンはⅢ Study War で忘れずに主張している。20代の中頃になったナットがジェルサレムの町でトーマス・リッドレイの美しいフィアンセを見かけて激しい

性衝動に襲われる。そこで彼はこの女の肢体をみつめながら、想像の中で荒々しく犯し始める。それは想像の中の出来事にしても、女は唯、恐怖と苦痛を示すのみで、歓びの反応は何一つ示さない。みだらな白昼夢から我れに返ったナットは虚脱感に襲われ、神経を痛めつけられ憔悴し切ってぼう然と町角に立ちつくす。その眼の前には現実の世界がありこの美しい女がバラソルをさして歩き去って行く太陽の輝く町が広がっているのみだ。) だから、ナットは絶望する以外にない。

エンメリンのこの行為はナットの美しい白人女性に対する趣好と反応を一変させてしまった。美しい白人女性はたゞ彼の性的衝動を激しく呼び起す存在に変わった。以来、彼は欲望を処理する際、エンメリンを想像した。彼女は彼の妄想の中でもだえ、歓嬉の中に神の名を口走っていた。

エンメリンが性交中に神の名を口走る、という設定には二つの意図が含まれている。

説教師ナット・ターナーはその自供書で、神の声を聞き、黒い天使と白い天使が戦う幻を見た、太陽がかげり昼が暗くなり、神は日蝕によって奴隷反乱のサインを示した、と述べている。彼がユダヤの人々を神の命でエジプトより導き出した予言者やアッシリア、バビロニア、エジプト帝国の強権下に神の声を聞き当時の隋落したイスラエルの王権に排戦した予言者達の書から奴隷解放の理念的支柱を得たのは明白であり、これは前回で述べた。W・スタイロンはこのナット・ターナーが聞いたという神の声を白人女性の性交中の歓嬉の声と複重させ、ナット・ターナーの反乱動機は白人女性への絶望的な欲情にあったとする。

もう一つは、ナットを III Study War で現われる白人牧師ホワイトヘッドの妹、マーガレットと関係づける上での布石である。

黒人男性

アブラハム

ナットが子供の頃サミュエル・ターナーの書齋より書物を盗んだのをみつけて、白人女主人達の前につき出した男で典型的な白人の下僕。

ウイッシュ

アブラハムの子でナットと同年輩の少年。便所にまたがっていると下からいたずらしたりする野卑な遊びしか知らぬ幼な友達。

ウィルス

ナットより二、三才下の少年。青春期のホモ行為のパートナー。美少年であったが売却されて行った。

黒人女性

ロウ・アン

ナットの母。ターナー家の台所仕事をしていた。主人邸よりこっそり食品を持ち帰って彼にうまいものを喰せた。彼が12、3才頃に白人監督マックブライドに犯された。目撃した時、拒否しているかどうか明確でなかった。

ルーシイ

半盲目の自由黒人なので吃喰。白人の奴隷主に金銭をねだって歩く。黒人を自由にすればそうなる、と作品は語る。

黒人の登場人物はすべて愚劣で醜くい者ばかりである。

彼がサミュエル・ターナー家の農場にいた間、エンメリンの行為に絶望しマックブライドの仕打に虚脱したが、白人を嫌悪しなかった。また黒人を嫌悪したが黒人である自分を嫌悪しなかった。自分は教育をうけた人間であり自由黒人への道を踏み、説教師となる前途があったからである。

IX

青春期以後、ナットはサミュエル・ターナーやネル、エンメリンといった部類の奴隷所有階級の上層にある白人男女と接する機会はなくなる。彼はもはや幼児でも少年でもなく、青年であり壮年となっているからだ。白人の男は心配ないにしても、彼が白人女性と接する場合には充分注意がいる。美しい白人女性と黒人男性とが接触する際にはエンメリンとの関係に見られるように、社会的、心理的距離或は障壁を装置して、両者の間に相互の人間関係が成立しないよう離反させておかなければならない。W・スタイロンのこの人種主義的配慮は III Study War で一層明白に示される。青年、壮年期の黒人男性を白人女性と接触させるには少年、青春期のそれより一層気をつけねばならない。そこでW・スタイロンは作品の構成上必要とされる、ナットと身近に接触する白人女性には決して美しい白人女性を登場させない。

ナットの新しい奴隷主トーマス・モアの妻サラは陽気で、知性なく、まるまる肥った女である。

冷酷で卑わいな奴隷主ナサニエル・フランシスの妻ラヴィニアは巨大な甲状線腫のあるたるんだ顔を、だぶだぶの男ものの仕事着を着ていて女体の線は全然見えないしありもしない。

ジョセフ・トラヴィスの異母妹マリア・ポーブは異様な体臭を発散させ、鼻閉寒症で口で呼吸する。唇は出血していて常に油がぬってあり、身体は骨ばってやせこけており40代にして処女である。

彼女達には白人女性の精神美も肉体美もない。これらの下層奴隷所有者達のもとで、ナットは半ば人間、半ば家畜の生活を黙々とおくることになった。他の黒人奴隷達は手荒い奴隷主に不具にされたり、妻を奪われ子供を売却されていた。見物人の前でめす犬と交尾させられている奴隷もいた。

W・スタイロンはナットはこうした黒人に対する白人の汚れた許しがたい

行為に関心はなかったとしている。ナットは白人に恥かしめられ、家畜にされて甘んじている愚劣な黒人を嫌悪した。

また、冷酷、卑わい、愚劣な白人達をもひどく嫌悪するようになった。だが、決して憎悪しなかった。白人を憎悪するには特異な体験を必要とする、とW・スタイロンはいう。

ナットはこれらの白人や黒人に対する嫌悪感によって、これを誘発させる外界から眼をそむけることになり、自閉症的状况の中で予言の書を精読し、激しい祈りに身をささげようになる。

W・スタイロンのナットは憎悪により白人大殺害事件を起す。その憎悪は奴隷制度とそれを維持する白人達に対する正義の怒りに生ずるものではなく、美しい白人女性に対する処置不可能な性衝動から生じたものである、とW・スタイロンはいう。つまりこの憎悪と自閉症的状况で狂信的になったナットの血生臭い使命感とが結びついたのがサザンプトン郡の大殺害事件である。

彼はⅢ Study War の初で黒人が白人に対していただく憎悪について、ナットの口を貸りて述べている。

白人に対する鋭く激しい憎悪は黒人なら難なくいだきうる感情であるが、これが心に育って白熱化した真実の憎悪——同情も人間味のある温情も共感も全く入る余地のない憎悪になるには、彼等と親しく接触して、彼等の寝具や下着の臭いをかいだり、ふざけた、おうへいな温情に屈服したり、彼等が性交している現場を見たりしなければ、また彼等の計略、二重性格、食欲さ、徹底した腐敗ぶりをよく知っていなければならない。こうした身近な接触がなければ、白人に対する憎悪はうわべだけのもので不能なものであるにすぎぬ。

この真実の憎悪を体験した時の一例（W・スタイロンはこの例とマーガレットの薄い下着一枚をまとった下半身をみてナットが感じる憎悪しかあげていない。これは白人女性の性的魅力と黒人男性の受ける性衝動の関係で憎悪

をとらえようとするためである)をあげている。

25才頃の夏(これはナット・ターナーの自供書によれば、白い天使と黒い天使が大空で戦う幻をみた時期である)ジェルサレムの町で北部から来た非常に美しい白人の女が、哀れで醜く、愚かで滑稽な黒人の男に同情して泣く姿をみた時であった。彼にとって上流階級の上品できゃしゃな、美しい白人の女が泣く姿は彼女から威厳のヴェールをはぎりとり、裸身の一部をのぞかせるようであった。これを見ていると発作的にひどい性衝動がわき起り、怒憤をまじえてたけり狂うようであった。そして彼は避けることの出来ぬ妄想のとりこになった。この美しい女の白いうなじや白い手をあてた横顔、やわらかな身体つきをみつめていると、想像の中の彼はこの女めがけて馳け出し、行ってしまった。そして女を路上に押倒し、その衣服を引き裂き、彼女の白い両脚をさらけ出し、手荒く残酷にその身体を汚がし犯し始めた。W・スタイロンはこの妄想的白昼夢における黒人の白人女性暴行シーンを二頁に渡って展開させる。

周囲のざわめきで幻想からさめたナットは心臓が激しく鼓動し、顔は興奮して汗まみれになっているばかりか股間が勃起状態にあるのに気づいてその場にうづくまる。ナットはこの出来事をよく反省し、聖書に答えを求めるが見つからない。

この白人の女を残酷な仕方でもって犯す性的衝動は白人憎悪そのものの現われではあるまいか、それはどうして触発されたか、殺人をも辞さぬこの憎悪に彼を馳り立てるのは白人の憐憫、やさしさにある、決して白人の虐待、侮辱、冷淡さではない、と彼は納得し、苦悶する。美しい白人の女がやさしさを示すことがある限り、彼はこの殺人的な憎悪を燃やす外ない。

何故そうなのか。それにはW・スタイロンの依って立つ人種主義のワナが作品に一貫して張られているので、そのワナにかゝって読めばこの憎悪の解釈は真実味をおびる。

ナット・ターナーにかけてあるワナは次のような人種主義の論理である。

黒人が人種主義を内含する白人文化に同化するとその人種主義的側面、および文化の階級的側面に制約される。白人上流家庭で育てられ奴隷所有階級の文化に同化したナットが上流階級に属する美しい女性に魅了され、また黒人を嫌悪したのも、この面で説明される。

彼が美しい白人女性のやさしさによって性衝動のとりこにされ、憎悪を触発されるのは人種主義は特にこの白人女性と黒人の性関係において黒人排外の極地に達するからであり、ナットはそれを内在化しているためである。人種主義を内在化することによって、ナットは白人女性との現実的性関係を自己の側からも拒絶する。しかし、白人女性の性的魅力に対してナットの生理は反応し呼応する。この生理的反応は彼に人種主義の束縛を想起させる。

激しく鋭く執拗な憎悪が起るのはこのためである。ナット・ターナーをこのW・スタイロンの人種主義的機械装置に入れて処理する以上、奴隷解放の指導者のイメージなど塵粉も残らないのは当然である。だが、この機械装置が生み出すナット像は白いアメリカの悪夢そのものである。白人は自ら作り出した墮落した黒人イメージに快感をおぼえ自虐し、また恐怖している。

ナットはこの白人に対する激しく鋭い憎悪にとりつかれることによって、自閉症的状况から脱し、外界へ出てくる。外界は憎悪の対象となる白人と嫌悪する黒人に満ちている。そして白人憎悪は黒人嫌悪をしのいで激しく、彼はこれに耐え難いまでに圧迫される。彼はこの白熱化した憎悪の中に予言者の書を読み祈る。大空に雷鳴がとどろき、日がかげり、白い天使と黒い天使が血みどろの戦いを展開げる幻を見る。そして、そうなるのがお前の定めだ、と天から声を聞く。彼は白い悪魔を倒す使命が与えられたのを知りおそれおののく。この聖なる力から彼はのがれることが出来ぬと観念する。

彼はそれ以来、白人に対する激しく鋭い憎悪を持つ黒人奴隷を秘かに見つけ出し、サザンプトン郡の白人大殺害の日に備える。その日は天より知らせが来る。

白人に対する憎悪は白人大殺害の使命感に変わった。ナット25才の時であ

る。こゝにナットを導いたのは三人の美しい白人女性、ネル、エンメリン、そしてジェルサレムの町に現われた女、リッドレイのフィアンセである、とW・スタイロンの作品は語る。

ナットは黒人奴隷としての仕事の間をみはからって他の奴隷達がたむろするジェルサレムの町で説教する。教会で信頼の出来る黒人を探す。憎悪にたける、だが指導力を持った四人の仲間をみつける。サザンプトン郡の地図を手に入れる。20代の後半がこうした中で過ぎ去ろうとしていたある日、ホワイトヘッド家へ大工仕事に行き、その娘、マーガレットを見かける。

マーガレットは17才の美しく若々しい身体の持主であった。彼女は書斎の床で大工仕事をしているナットの鼻先に、薄い下着、パンタレット一枚をつけた下半身を向けたまま、書棚に本を探し、彼女の母と話を交していた。彼女には黒人を人間として、白人とは同一視しない自然な気持があった。だから、彼女は下半身が下着一枚の姿でいてもナットの存在などないも同然で気かけなかった。

ナットの眼はそのすぐ前で、彼女の身動きと共に小きざみにゆれる肉づきのいゝ尻に釘づけにされた。それは薄い下着がくっついて、しかもすけて見えた。彼はそれを見まいと抵抗するが、この白人娘の形のいゝ両脚に支えられた尻部を二つに分ける曲線の奥まったところへ眼が引きつけられて行くのに抗せない。彼はマーガレットの肉体の魅力にとりつかれ、緊張し、あえいでいると、彼女はふり返ってさりげなく問いを發する。彼は恥辱を感じ興奮した眼を上げることが出来ず、じっとうつむいて激情が鎮まるのを待つ。そして心の中でこのめす犬め／＼と彼女の無頓着ぶりを呪いながらも、声を抑え従順な奴隷として丁寧に答をする。彼女はまた母に話をもどし、はしやぎながらナットの前を去るが、この肉体のとりこになった彼には去って行くのは薄い下着につつまれたマーガレットの下半身だけであるように感じられた。彼は彼を心底から悩ませる魅力にみちた肉体を持った彼女をひどく憎悪する。それは絶望的な憎悪であった。

この年より4年前、彼がジェルサレムの町で見かけたリッドレイの美しい女は40才ばかりで、しかも衣服を身にまとっていた。彼はこの女が泣きくづれるやさしさにその裸体をみる思いで性衝動を呼びさまされ、白いうなじと白い横顔、それをおもう白い手に欲情を起し、妄想の中で衣服を剥ぎ取ったが今度は17才の若々しい肉体を持った美しい娘が薄い下着一枚の下半身を彼の鼻先にあらわにさせていた。彼には妄想する余裕もなく、妄想の中で犯す余地すらなかった。彼はただ逆上と怒憤と興奮の中にこの肉体に身も心も奪われてしまった。美しい白人女性に対する性衝動に憎悪が愈着するのは、人種主義を内在化したナットの性衝動に同時的に人種主義の抑止作用が働きかけるからだ。

W・スタイロンはこの出来事を、ナット・ターナーがその自供書で述べている1828年の初夏の出来事に重ねようとしている。この頃、彼には聖霊が現われて、白い悪魔と戦う日が近いことを教え、このことは天のしるしがあるまで口外すべきでない、と告げる心の事件があった。W・スタイロンはこの精神状況をマーガレットの性的魅力による色情的異常心理より生れた奇怪な心の体験に帰そうとしている。

ナット・ターナーにとって、天のしるしは1831年2月の日蝕となって現われるが、W・スタイロンのナットは日蝕と共に祈りを始め、それは執拗な欲情によって妨げられる。これは奇妙な妄想を生む。ナットの前に、一人の黒人娘が全裸になって現われ、彼におおいかぶさり、彼の肉体の一部に手をかけて欲情をそそり立てる。彼は神の名を呼んで抗しようとするが不可能である。彼が立ち上り、激しい欲情を処理し始めると、妄想の中の黒人娘は消え白人娘がこれに代る。彼はこの娘の肉体を念頭に欲望を処理する。妄想から目ざめると、彼はみだらな姿で松林の中に立ち、神に助けを求め苦悩を訴えている自分に気づく。

W・スタイロンはこのナットの苦悩と絶望にみちた欲情によって何を示すか。彼は、ナットは狂信的な白人殺害の使命と白人女性の魅力によってかき

立てられる白人憎悪とを一度は一体化し得たが、若いマーガレットの肉体をみて以来、この憎悪から性衝動が分離しかけ、白人憎悪の迫力がかげり始め狂信的使命感の支えがゆらぎ始めたことを示さんとする。

また、欲情をみたく妄想の中に、まず黒人娘が全裸で現われ、さらに彼の肉体に手をかけて欲情を高め、その後、白人娘が現われるのは何を意味するか。ここには白人男性中心の人種主義の論理が展開されている。

黒人の男の欲情を誘い、これをかき立てる行為をするのは黒人の女であって白人の女ではない。黒人の男は彼に完く無関心である白人の女の肉体をみることによって勝手気儘に性衝動にかられるのだ、という論理である。

1831年の8月下旬にナット・ターナーの反乱が生ずる。この夏、W・スタイロンのナットは馬車でマーガレットを彼女の友人宅へ送りどける仕事を主人に命ぜられる。人里離れた道を行く途中、ナットは横に坐っている19才の身体に成熟したマーガレットの肉体が汗ばみ、馬車にゆれるのに激しい性衝動にとりつかれる。スカートの下にあらわに列んだふともものゆれは彼女の甘美で甘酸っぱい体臭と共に彼の欲情をそそる。

彼女はナットの欲情が盛んであることに気づかず、清純な気持で、楽しげに、神の愛について、キリストの愛について語り、神の愛の前には白人も黒人も同じであるべきだ、と熱心に主張する。欲情に襲われ、マーガレットの肉体の動きに過敏に感応している彼の耳には彼女の口から流れ出る愛の言葉は騒々しく妨げになるばかりで怒憤する。

彼は人気のない松林の中に入ったとき、無心に話しつづける彼女を犯したい衝動に馳れつつも身近に迫っている白人殺害の使命感が妨げてどうにもならない。だが眼の前の彼女の肉体は彼を興奮させ彼の身体の一部を硬直させる。彼は欲望し、恥辱を感じ、焦燥する。この精神的錯乱のうちに、彼はマーガレットに促されて道を急ぐことになる。彼の性衝動にはここにも白人社会の総体としての力が内的に作用し、現実でこれを満足させるのを抑止しそれが憎悪となって彼を動転させる。

反乱は彼の心の混乱がまとまらぬうちに、四人の部下が集めて来た憎悪に狂った黒人達の手で進められて行くことになる。主導権はウイルという残忍この上ない男がにぎり、ナットは次々と殺害されていく白人の血まみれの姿に恐れおののくばかりである。ウイルは反乱の最中、情容赦なく白人の女をナットの目の前で犯す。この出来事は彼等反乱黒人の一団がマーガレットの家に向う時、ナットを恐怖させる。ウイルがマーガレットを犯すことになるかも知れぬからだ。このマーガレットが犯されはせぬかというナットの恐怖はアメリカ白人読者の恐怖でもあろう。

ナットはウイルに命じられてマーガレットを殺す破目に落ち入る。

W・スタイロンはナットに追い廻されるマーガレットを白い亡霊が動き廻るように描いている。マーガレットの若々しい身体はここでは馬車にゆれるような肉体感があってはならぬからだ。白い蝶がひらひらと夕暗を行くようだ。ナットも汗を流し、うわの空で追っている。マーガレットが人間味をおびるのは致命傷を負った死の寸前に、かなしく痛みを訴え、その切なく痛々しい声がナットの胸をえぐり、彼を泣かせる時だけである。

マーガレットの死体のそばに彼は時の推移を忘れてたたずむ。美しい白人女性は死んでしまっている。そのそばに黒人の男が夜たたずんでいてもはや心配ないのだ。ナットはマーガレットの亡霊が両手を上げて立ち上り、永遠の愛の中に消える、と甘美な声を残して消えるのを見たように思う。彼は欲望の対象者を不本意に殺してしまってから、その精神に眼を向ける余裕が生れる。白人女性の性的魅力は彼女が生きている限り、それほどにまで強力なのだ。反乱後、捕えられて獄舎につながれた彼は神に祈るが何の応答もなく、ただ沈黙があるばかりであった。彼は神に見放たれたのだ。

この神に見放たれた彼の恐怖は I Judgement Day でも述べられている。彼は神の沈黙にその意味を求める。処刑の日が来ていた時、ナットは禁じられていた聖書をトーマス・グレイに手渡される。聖書を手に窓辺に寄って早朝に近い空気を胸にすい込み明けの明星を仰ぐと草木の匂いがして甘い思い

出が返ってくる。彼にはいづれ処刑の時が来る。神に召される言葉を心にくり返しているとわかeni マーガレットの思いがよみ返り、欲情が再び高まる。彼は彼女の白い肉体を狂ほしいまでに求めて、妄想の中で愛撫すると、彼女は満足げにこれに感応し、身を弓なりにしてナットにまかせ欲びに叫び声を上げ二人は一体となる。この情感にひたりながら、「来い！」とナットを引き立てる白人処刑人の声に彼は身をゆだねて処刑場へ連れ出されて行く。この声はナットを召される神の力強い声に変貌しているのだった。

白人女性の精神と肉体両方のとりこになったナットは一度、その肉体のみのとりこになって精神錯乱をきたし、その肉体を抹殺した。結局、それを得ることは不可能であった。

彼は処刑を待つ間に、再び白人女性の精神のとりこになった。それは地上的なものでなく彼岸的なものであり、またよみ返った肉体への欲情も死刑によってこの世から葬られる際の聖なる白人女性への情感的憧れと信頼以外の何物でもない。美しい白人女性は地上では黒人のものにはならぬ、とW・スタイロンは結論する。

X

W・スタイロンの人種主義に基づく白人女性と黒人男性間の性関係、白人女性に対する黒人男性の性交なき、一方通行的性衝動とその破滅、ナット・ターナーの白人女性への屈服、従順の物語は、現代アメリカ社会の人種主義感情、ドグマの反映であると共にそれへの働きかけの物語である。この作品は黒人に対する偏見、差別を増長する極めて悪質な作品である。この種の作品が生み出され、ベストセラーとして読者を確保するのは、この文学作品が人種主義アメリカで、重要な社会的役割を果たすからであろう。これは、黒人の意識変革を通して高まりつつある解放運動への白人の恐怖を人種主義的斯瞞によって鎮めんとし、さらに黒人解放運動への反感と敵意を育てる役割を

持つ。急を要するこの仕事は最も卑近な、すぐ利用しうるアメリカ社会の他人種との異性関係に関する執拗な、人種主義的感情に依拠してなされている。ここに、アメリカ社会の性に関する人種主義感情の現状をみよう。

Robert Brooks は *Sex-Black and White* (New York, Dell Publishing Co., Inc. 1971) でアメリカでの白・黒兩人種間の性関係に対する白人の観念、これに基づく黒人への態度をⅠ今日の実状、Ⅱ歴史的展望、Ⅲ過去および現代の文学における兩人種間の性、Ⅳ将来への展望、の四分野で論じている。ブルークスの考えは次のように要約出来る。

白人と黒人とは支配—被支配の関係にあり、多数派であり、強力な支配者であった白人は黒人奴隷制時代より組織的黒人差別の時代である今日まで、一貫して黒人を白人と対等な人間とみなすことを拒否し、野性的で動物性の強い、非文明的な準人間とみなして来た。今日、この考えが誤っていることは知的レベルでは納得されて来ており、アメリカ白人の民主主義およびヒューマニズムの理念に反することも分っている。だが、感情のレベルではどうしても黒人を対等の人間として受け入れ難く、対等な人間関係、相互補完的身体関係を成立させることが出来ない状態にある。この人種主義にわざわざされた感情は、それを満足させる斯曩の知識を必要とし、それをもとに感情を安定させる。白人は多数派であり、支配者である故に、この人種主義感情にもとづく欲望を現実的に満足させ得るし、そうして来た。黒人女は野性的と見える故に、文明の拘束とモラルの規制のワクの中で相互補完的身体関係を保つ白人女よりも、充分に白人男の性欲を満足させ得ると感じ、支配者の力で、被支配者の黒人男よりその女を奪ってこの欲求を満して来た歴史的事実がある。この事実は同時に、被支配者の黒人男が支配者である白人の女に対しても同じ性的満足を与えるのではあるまいか、という恐怖を生み、この恐怖感が黒人男を白人男の一層強力な冷酷な支配下に抑圧しておく心理的必要性を生んだ。(Part II Historical Perspective より)

この歪められ、緊張をはらんだ心理的要素をふくんだ支配—被支配関係の

中で、黒人の超性的能力への妄想は白人の意識に侵透しており、兩人種間の異性関係を憎悪し、あるいは嫉視し、またこれを求める者達が存在する。

(Part I Contemporary Scene) また、この妄想を軸にした白人と黒人関係が文学作品のテーマとなって読者の感応を高めたりしている。(Part III Interracial Sex in Literature Past and Present)

ブルークスはこの白人社会の兩人種間の性関係に対する考え、態度を道義的墮落とみている。人種偏見によって汚染された白人の黒人に対する態度を変えなければ、白人は自己斯謫の悪循環から脱し切れなくなり、自らの人間性自体を荒廃させてしまう、つまり、自らの誤った考えの犠牲者になる⁽¹⁾、と彼はいう。

では、どうすればいいか、彼は若い世代に期待する⁽²⁾、という。彼は若い世代の新しい考えを明白に規定せずただこの世代は旧い世代より人種偏見より比較的自由であると考えているにすぎない。人種偏見が支配—被支配という政治、経済の仕組を基盤に存続し育てられている以上、若い世代が体質的に旧い世代より比較的リベラルであることに、人種偏見の解決の糸口をつかむことは出来まい。

ブルークスの解決の展望に問題があるにしても、彼がこの書物で明らかにした現代アメリカ社会の兩人種間の性関係に関する妄想の一般的流布には注目してよかるう。W・スタイロンの「ナット・ターナーの告白」がアピールする社会的地盤が存在するわけである。だからこそ、この小説は白人社会の抑圧をはねのけんとする黒人にとっては問題になる作品なのである。

1960年代の後半より1970年代に入るに従って黒人意識が高揚され、黒人の間では白人の価値観にもとづく、黒人イメージに亀裂が生じ、また白人の価値観に準じて自らのイメージを形成することを拒否する風潮が高まった。それは気運としての Black Power に全般的に現わされている。これは黒人解放運動の中から生じた運動方針つまり黒人の政治的、経済的な力の結集を意味する言葉であったが黒人の社会的行動形態、社会的意識にまで広く影響を

及ぼしているのは広い概念であって、この民族気運としての Black Power に対する白人社会の反響を兩人種間の異性関係に見てみると白人社会が何を恐れ、何を願っているかが明らかになる。Time 誌と Newsweek 誌からこれを取り出してみよう。

Time 誌は1968年7月19日号と1970年4月6日号で、News week 誌は1968年6月3日号で、大学構内での黒人学生と白人学生との異性関係を学生運動における Black Power との関係で論じている。

Time 誌の論争を要約すると次のようである。

大学構内での兩人種間の異性関係のパターンは黒人学生と白人女子学生との関係によって成り立っている。このパターンに属する異性関係を持つ者は学生間の少数にすぎぬが、年々その数は増加し、行動は公然化する傾向にある。これは大学に入学する黒人学生数が増加していること、学生は社会の古い慣習に拘束されることが比較的少ないこと、さらに近年の市民権運動で黒人に英雄的イメージが加わり、これに白人学生が共感を覚えるためであろう。異性関係が黒人男子学生と白人女子学生との関係になるのは黒人男子学生にとって白人女子学生は黒人女子学生よりも主として美的観点および社会的特典から魅力があり、白人女子学生にとっては主として性的観点から黒人男子学生に魅力があるためと思われる。

この論評を裏づけるべく、Time 誌はインタビューによる証言を提供する。

ボストン大学の白人女子学生——「大抵の女の子達は黒人の男は実際あれがある(あれ=supersexuality 筆者注)と思っているのです。これはどこの大学ででもいえることです。それ(黒人男子学生と白人女子学生の交友関係=筆者注)はまさにこの性的満足そのものにあるのです。」⁽³⁾

同大学の黒人男子学生——「白人女子学生は私の何が欲しいのだろう。私達はそんなに違うのだろうか、何か動物のように思っているのだろうか。何故、こんなにも沢山の白人女子学生が私達を追い廻すのだろう。」⁽⁴⁾

この種の証言を強化すべく、*Time* 誌は Negro Digest より、黒人女優 Abbey Lincoln の黒人男性を求める白人女性批判の一節を掲げる。

「悪質なほど失礼極まる、偏屈な、にやにやした、モラルの欠如した、情緒不安定な、社会からつまはじきされた、不適応者である、色気狂いの、身を落した白人女達⁽⁵⁾」

では黒人男子学生が白人女子学生を求めるのは何故か。

シアトル市の Urban League の一員の見解が述べられている。「白人とデートすることは黒人の男としての自己確認の本質的な部分であり、さらに美しく魅力ある白人の女の子は黒人の男の子が攻略すべき最後の牙城だからです。」白人の女の子とデートすることは黒人の男にとって人間的、社会的存在としての自己確認の不可欠の部分⁽⁶⁾をなし、また社会的適格者の象徴でもある。そればかりではない。カルフォルニア大学の黒人男子学生はいう。「黒い男:(black cats) が白い娘 (white chicks) をわざとめて遊ぶのです。黒人男にとって、白人女は神秘の世界につままれていて、尊敬されているでしょう。だから、わかるでしょう。」⁽⁶⁾

Time 誌によれば、兩人種間の異性関係は人種主義の拘束の中で成り立っており、純然たる人間関係より生じた兩人種間の個人的結合も外部からの人種主義的圧力と内面から生ずる疑念、人種主義から自由な個人であるか否かの自問によって苦悩せざるを得ないことになっている。

こゝで注目しなければならない点は、黒人男性と関係を持つ白人女性が他の大多数のそうでない白人女性に比べて少数であるばかりか、「悪質なほど失礼極まる、偏屈な、にやにやした、モラルの欠如した、情緒不安定な、社会からつまはじきにされた、不適応者である、色気狂いの、身を落した」女達であり、黒人男性が人間的、社会的自己確認の本質的な部分として求め、或は白人社会に対する報復的なもて遊びの対象とし得るのは、この種の女性のみであることを印象づけていることである。

そして、さらに注目すべき点はこの黒人男と白人女との異性関係を Black

Power を主唱する黒人の二重人格的背信行為として取り上げていることである。

「パトリック・ケレイ、デトロイト出身、24才のこの黒人はその典型である。彼は黒人意識を強く持ちながらも、黒人として生きていない、生ける矛盾者と自らを呼んでいる。」⁽⁷⁾

マンハッタンの或る黒人女性は「『黒人は美しい』という考えは殆んど黒人男性に影響を与えていません。黒人男性達には黒人のちぢれ毛と厚い口唇は魅力がない。白人女性は未だに彼等にとって自らの社会的能力を示す上での象徴な獲得物なのです。」⁽⁸⁾ といっている。Black Power はそれほど力がない。

こうした Black Power への反感は Newsweek 誌にもはっきりと現われている。

「白人女性といちゃいちゃしていて、どうして Black Power であり得るでしょう。」⁽⁹⁾ とノースウェスタン大学の黒人女子学生は疑問を発している。黒人男子学生達の間では白人女子学生とのデートを止めようとする努力がなされているが、多くの黒人女子学生は男子学生は口には Black Power を語り現実には白人女子学生と外出する、と報告している。

では白人社会は Black Power に何を期待しているのであろうか。

「最近のハリス世論調査によれば、72%のアメリカ白人は親しい友人や親戚の者が黒人と結婚しようとするれば反対するであろう。」⁽¹⁰⁾ これは人種主義感情とドグマによる。ところが奇妙なことにはこれらの白人達の多くが「Black Power の概念を受け入れており」⁽¹¹⁾ 彼等は「この力が実際効果を現わして、黒人が白人社会から分離するのを見たがっている。」⁽¹²⁾ つまり、人種主義的感情、ドグマの持主は Black Power の概念を「人種隔離」のそれでうけとめている。こゝで Time 誌は黒人革命家 Eldridge Cleaver の言葉を高く掲げる。

「アフリカの花よ、自分の男らしさがとりもどせるのはお前の解放の力で

ある愛によるのみだ。」⁽³⁹⁾

Black Power に対する白人社会の期待は黒人の男は黒人の女のみと関係を持ち、白人の女とは縁を切ってくれ、ということである。何んと憐れにして、愚かな願いであろう。白人女性が黒人男性に魅了されるのは、白人社会一般の人種主義的妄想からすれば、若い白人女性は黒人男性の超性的能力にその性衝動をかられていると思ひ込む。若い白人女性が魅力を感じるのは Black Power の概念に表明されている人間性回復のたくましい力の面にある、と考えることが全く出来ぬほど盲目であるといえる。白人社会は被抑圧者が自らを解放せんとす、その力を発輝し始めている社会的現実と、この被抑圧者の自らを解放せんとする輝かしい斗争に白人の若い世代が共鳴し、共感し、或は魅力を感じずという事実を眼をおおわんとしていることを明示している。マルコムXが、ブラック・モズリムの指導者として活動していた頃、白人女子大生が、何か協力させて欲しい、と彼を訪れたことがあった。彼がこれを断って門前払いを喰わずと、この女子学生は涙を流して帰って行った。後年、彼はこれを非常に後悔していると Life 誌の写真家 Gord Parks に述べたといわれるが⁽⁴⁰⁾、この女子学生も人種偏見と性関係にまつわる執拗な人種主義感情の巢喰った社会では黒人男を求める性心理の異常な女と見られよう。そればかりか、彼女を拒否したマルコムXに「人種隔離」の協力者として感謝するであろう。

アメリカの若い世代の間に、人種主義的思考をかなぐり捨て、自らの社会と国家が行う不正行為に対して排戦し、抑圧された側の人々と手を結ぶ者達がいる。

Black Power の核心は白人の力を、政治、経済、文化、社会の各面より追放した黒人の共同社会を形成しつつ、人種主義を包含する白人文化に拘束された黒人の意識を解き放たんとするところにある。これら若い世代の黒人の生々とした自己主張に、白人の若い世代が共感して不思議でない。

だが、他民族支配による物質主義的繁栄の生活に慣れ、またゆるがぬ社会

体制のもとにこれを満足しようとする多数のアメリカ人にとって、内部から生ずる被抑圧者の勇敢な闘いと自己主張は恐るべきものであろう。白人社会はこれが墮落し、人間性に欠如しているとしてこの社会への統合を拒否し、人種主義を内含する白人文化を拒絶し、組織的な黒人の社会的、精神的結集を主唱し運動する Black Power 運動に対しては特にそうであろう。

W・スタイロンの「ナット・ターナーの告白」は、人種主義の流布した白人社会の社会的、心理的恐怖を背景に生じ、これを作品によって安堵せしめるばかりか、人種主義感情とドクマを一層補強させ、人種偏見、差別が触発する精神不安の麻痺剤の役割を果すものであろう。それはあくまで麻痺剤にすぎない。それは (I) に述べた如く、黒人ボクサー、ジャック・ジョンソンの名を禁句とした南部白人社会、フィルム作成によって、白人ボクサー、ロッキー・マルシアノにモハメッド・アリをノック・アウトさせた興行界を通じての、黒人の力に対する抵抗と同じく、真実の力に対する無駄な斯隲的抵抗にすぎない。

(完)

注 (1) Robert Brooks, *Sex-Black and White*, (New York, Dell Publishing Co., Inc., 1971) A Note to the Reader, p. viii.

(2) *Ibid.*, p. 208.

(3) *Time*, April 6, 1970, p. 42.

(4) *Ibid.*, p. 42.

(5) *Ibid.*, p. 42.

(6) *Time*, July 19, 1968, p. 44.

(7) *Ibid.*, p. 45.

(8) *Ibid.*, p. 45.

(9) *News Week*, June 3, 1968, p. 29.

(10) *Time*, April 6, 1970, p. 42.

(11) *Ibid.*, p. 42.

(12) *Ibid.*, p. 42.

(13) *Ibid.*, p. 42.

(14) *The Autobiography of Malcolm X* with the assistance of Alex Haley, Penguin Book, p. 53—54.